

オスロ「ノーモア・ヒバクシャ」響く

平和賞の被団協、市民と行進

【オスロ時事】日本原水爆被害者団体協議会（日本被団協）へのノーベル平和賞授賞式が終わった10日夜（日本時間11日未明）、ノルウエーの首都オスロでは市民らが見守る手に「ノーモア・ヒバクシャ」と声を上げ、日本被団協の功績をたたえた。受賞を祝う晩さん会も開かれた。



日本原水爆被害者団体協議会（日本被団協）の亡くなった被爆者らの写真パネルを携え行進する人々＝10日、オスロ（AFP時事）

午後1時からの授賞式後、日本被団協の被爆者らは宿泊先のグランドホテルに移動。代表委員の田中重光さん(84)は「責任が重くなったと感じる。若い人たちに運動をバトンタッチするため、機会を多

く持たたい」と気持ちを新たに。日暮ると、市民らはいまつや、ノルウエー語で「核兵器 反対」と書かれた横断幕を手にオスロの街を進行。日本被団協の代表団も、共に活動しなくなった被爆者らの写真パネルを携え参加した。

午後7時、代表委員3人がホテルのバルコニーに。市民核抑止・廃絶、矛盾せず 官房長官、首相と 被団協の面会調整

林芳正官房長官は11日の記者会見で、日本被団協の田中昭巳代表委員がノーベル平和賞授賞式で核兵器廃絶を訴えたことに関して、「米国の拡大抑止を確保しつつ、核兵器のない世界」に向かつて努力することは、決して矛盾するものではない」と強調した。林氏は、石破茂首相と被団協メンバーの面会を調整していくと説明。田中氏が原爆犠牲者への国家補償を求めたことについては「戦災で亡くなった方と同様に給付などは行っていない」と述べるにとどめた。

平和賞フォーラムで核軍縮議論

【オスロ時事】日本被団協のノーベル平和賞受賞を記念し、核軍縮などを議論するフォーラムが11日、ノルウエーのオスロ大学で開かれた。過去の受賞団体代表に加え、広島と長崎の被爆者2人も登壇。それぞれが自身の被爆体験を語り、「核なき世界」に向けた行動を世界に呼び掛けた。

被爆者2人も体験証言

フォーラムの題目は「核兵器脅威にどう対抗するか」。被爆者代表として、広島市出身で通訳者の小倉桂子さん(87)と、長崎で被爆した日赤長崎原爆病院名誉院長の朝長万左衛門さん(81)が講演。小倉さんは英語で被爆体験の証言を続け、朝長さんも長年医師として被爆者医療に携わってきた。小倉さんは「家々は破壊され、真っ暗で何も聞こえなかった」「水を飲んだら皆死んでいった。(何もできなかつた)私が入らなかつた」と自分を責め続けた」と生々しく詳述。「死ぬ前に核のない世界を見た。いつかそうできると信じている」

と訴えると会場から拍手が湧いた。朝長さんも2歳の時の被爆体験を語り、「核廃絶を実現するための責任」を履行していかうと呼び掛けた。フォーラムには、2017年に平和賞を受賞した国際NGO「核兵器廃絶国際キャンペーン(ICAN)」、05年受賞の国際原子力機関(IAEA)、1995年受賞の国際科学者団体「パグウォッシュ会議」各代表と有識者がパネリストとして参加。核戦争のリスクを軽減し、核軍縮を進めるための戦略(ノーベル賞委員会)を巡り意見を交わした。